

論文内容要旨

論文題目：歯科衛生士のプロフェッショナルリズム醸成モデルの研究

学位申請者 長谷 由紀子

[序論]

現代のプロフェッショナルリズムは、「社会との契約に基づいた価値ある行動を取る能力」と定義されており、医療プロフェッショナルが生涯にわたってその研鑽に努めなければならないコアコンピテンスの1つである。

プロフェッショナルリズムの現代版初出となった米欧 3 内科学会の新ミレニアム宣言(2003)後、わが国ならびに諸外国で、それぞれの医療専門職における倫理綱領・行動規範が見直された。しかし、プロフェッショナルリズムを具現化するまでには至っておらず、多職種連携医療ならびにその教育というトレンドな動きとともに、それぞれの医療専門職のプロフェッショナルリズムを確立する研究が各医療職教育・研究機関で開始されたところである。

これからの歯科衛生士(DH)には、疾病の治癒・克服支援から緩和・共存・生活の質(QOL)を支援する口腔衛生管理能力、多職種連携(協働)能力、ケアリング能力などが求められている。国際歯科衛生士連盟(IFDH)並びに日本歯科衛生士会の倫理綱領や憲章をもとに、わが国の歴史・文化的背景や社会構造、医療制度などを踏まえたプロフェッショナルリズムの確立と教育への導入が望まれるところである。

筆者の修士研究で、27大学の歯学部・歯科大学附属病院に勤務するDH603名の無記名記述式質問紙調査(回収率82.8%)を実施した結果、DHのプロフェッショナルリズムは、科学性(知識・技術力、省察力、科学者としての側面)、人間性(人間力、誠実・高潔)、社会性(社会契約・社会貢献・奉仕、専門性の確立、将来展望と専門職の養成)の構成概念が抽出された。また、20歳代では科学性、30歳代では人間性、40歳代以上では社会性という順にプロフェッショナルリズムを獲得している可能性が示唆された。

本研究では、DHのプロフェッショナルリズムのモデルを創るために、現在のDHのプロフェッショナルリズムの獲得・醸成に関わる因子について卒前教育と卒後キャリアとの関係を明らかにした。

[材料と方法]

1. インタビュー調査

筆者の修士研究の質問紙調査で回答を得た4大学附属病院に勤務するDHのうち、DH組織管理者(DH長・主任等)から推薦を受け、インタビュー調査に同意を得た18名(23歳～57歳)にプロフェッショナルリズムに関する半構造化面接(約1時間)を実施し

た.

2. 質的分析

インタビューで得られた言語情報を用い、SCAT法(Steps for Coding and Theorization, 大谷 2011)でコーディング(概念化)を行った。コーディングによって得られたストーリーライン・構成概念、理論記述からDHのプロフェッショナリズムに関わる概念を抽出し、カテゴリー化を行った。

[結果]

1. DHのプロフェッショナリズムの構成概念を修士研究における結果と文献・各組織の提案などを基に分析・検討した結果、卓越した専門性・自己研鑽と生涯学習の科学性、倫理的行動・人格・ケアリングの人間性、ビジョンと実行・責任・多(異)職種連携の社会性に分けられた。
2. プロフェッショナリズムの醸成順序は、短大・専門学校出身の30歳代以降のDHでは、科学性→人間性→社会性の順であった。一方、4年制大学出身のDH(20歳代)では責務、使命感、自覚、主体性、関係構築、人を動かす力などの社会性の概念が多く抽出された。
3. DHのプロフェッショナリズムには、歯科診療所ルーツで現場での経験則という主観(体)的根拠をよりどころとする【エキスパート型】プロフェッショナリズム、大病院ルーツで客観的証拠に基づく専門性を正義と考える【スペシャリスト型】プロフェッショナリズム、IPW経験者で患者と共に生き、医療で患者・家族(地域)を支える【パートナー型】プロフェッショナリズムの3つが存在した。

[考察]

今回抽出された8つの構成概念は先行研究で抽出された概念の構成成分とよく類似しており、本研究の妥当性が示唆された。また、プロフェッショナリズムの獲得・醸成順序や構成成分の内容やタイプは、出身教育機関の学習目標やカリキュラム(講義、実習など)と卒後の職場環境での学びの形態から大きく影響を受け、特に教育機関での学びが卒後の個人のプロフェッショナリズムの傾向に深くかかわっていると推測された。

[結論]

DHのプロフェッショナリズムの構成成分や獲得と醸成には、卒前の学習、卒後のキャリア環境や臨床現場における個人や関連する他者との相互(協働、協調)学習が深く関与していることが示唆された。